

リーベンゼラ・ミッションによる日本宣教の始まり₁

飯 田 勝 利

目 次

序論

1. エルンスト・ウーリッヒ宣教師の働き
- 1-1. 第一次世界大戦までのウーリッヒ
- 1-2. 南洋諸島宣教再開とウーリッヒ
- ① 一九二五年、南洋諸島宣教の再開の知らせ
- ② 一九二六年、軽井沢で与えられた日本宣教への重荷
- (1) 一回目の日本滞在
- (2) 二回目の日本滞在
2. 一九二七年、リーベンゼラ・ミッションによる日本宣教開始の年
- 2-1. ミッション理事会の動き
- 2-2. シーリング宣教師たちの派遣

2-3. ウーリッヒによる「私の第二回目の日本滞在にした体験と経験」の結論」

2-4. 一九二七年九月一日、シーリング宣教師たちの横浜到着

2-5. 大庭芳太郎牧師の献身的な援助

2-6. 菊名の宣教師館の建設

結論

図

序論

一八九九年一月一日、ドイツ人牧師ハインリッヒ・ケルパー (Heinrich Coeper, 図一) によって、ハンブルクに、チャイナ・インランド・ミッション (China-Inland-Mission, 以降CIMと表記)・ドイツ支部が設立された。²同日、ハインリッヒ・ヴィット (Heinrich Wirt) が中国への宣教師として志願し、派遣準備に入った。CIMはイギリス人宣教師ハドソン・テラー (Hudson Taylor)³によって中国宣教のために設立された宣教団体であった。一九〇二年四月に、CIMドイツ支部はハンブルクから南ドイツのバー・ト・リーベンツェル (Bad Liebenzell) に移転した。一九〇六年には「チャイナ・インランド・ミッション連盟リーベンゼラ・ミッション、リーベンツェルに所在する有限会社」(Liebenzeller Mission im Verband der China-Inland-Mission, Gesellschaft mit beschränkter Haftung, Sitz in Liebenzell) という名称になり、リーベンゼラ・ミッション (Die Liebenzeller Mission) と呼ばれるようになった。

一九二五年に発行されたパンフレット (図七-一〇) は、リーベンゼラ・ミッションを次のように紹介し

ている。⁴リーベンセラ・ミッションは、組織的には、信仰が健全な限り、宗派や国籍に関わらず協同して働き、また、あらゆる階層から神の召しを受けた人を内外の働きに用いた。特に、女性に対する内外での働きのために、女性の力を十分に用いるとも記されている。

聖書観は、聖書全体が靈感されたものとして重要であり、信仰と生活にとって決定的であるとされた。

宣教師としての訓練の面では、霊的訓練と霊的備えが第一で、学問的な面は第二目標とされた。神学校には二〇才から二七才までの若い男女が受入れられた。神学校での訓練期間は三年で、その後実践的教会奉仕を行い、それから宣教地へと派遣された。

働きの方法としては、国内においては、伝道と牧会、子どもや病人に対する働き、国外においては、開拓伝道、学校、巡回説教、医療伝道を行い、その働きの目的は、目前に迫っている主の再臨を意識すれば、神の教会の、まもなくの、内的な、また数的な完成にあるとされた。宣教地における当局の援助については、権利として要求するのではなく、恩恵として頼むべきであり、そのときはなるべくミッション本部を通すものとされた。

経済的には、ミッションを支援する人々や教会からの自発的な自由献金によって支えられていたが、献金の呼びかけなどはせず、負債も持たないとしていたため、働き人の給料は固定されていなかった。⁵

リーベンセラ・ミッションの海外宣教の働きを概観すると、中国では一九〇二年から湖南省宣教に専念し、教会開拓の他、医療伝道や教育伝道を展開した。また、ドイツ領南洋諸島宣教に着手していたクリスチャン・エンデヴァー⁶・ドイツ支部のブレッヒャー牧師(Pastor Blecher)からの相談を、ケルパーは主からの召命と受けとめて、一九〇六年からポナペ(現在のポンペイ)やトラック諸島(現在のチューク諸島)にも宣教師が送られた。一九一四年からはドイツ領ニューギニアのアドミラル諸島にあるマヌス島宣教も開始し

た。

第一次世界大戦によって南洋諸島の支配権がドイツから日本に移ると、一九一九年までにリーベンゼラ・ミッシェンの宣教師たちは退島させられた。そのかわりに日本当局は、日本人キリスト教宣教師の入島を認めた。プロテスタントのミッシェンとしては、一九一九年一〇月に組合教会の小崎弘道牧師によって組織された南洋伝道団が入島した。

一九二五年、リーベンゼラ・ミッシェンは南洋伝道団の一員として宣教を再開できることが知らされた。ミッシェンの理事会は、まず南洋諸島宣教を監督していたエルンスト・ウーリッヒ (Ernst Uhlig、図二) を日本に派遣して当局や南洋伝道団との交渉に当たらせることを決定した。

このように、リーベンゼラ・ミッシェンにとって日本との関係は、宣教対象というよりは、南洋諸島宣教のための事務的な拠点として出発するはずであった。しかし、ウーリッヒの働き以来、リーベンゼラ・ミッシェンは日本で宣教の働きを進め、今日まで約八〇年という時間を歴史の中に刻み続けている。けれども、リーベンゼラ・ミッシェンが消極的に事務的な活動にとどまるのではなく、積極的に宣教活動を展開するに至ったことについて、これまで実証的に明らかにされてこなかった。本論文では、この課題について取り組み、リーベンゼラ・ミッシェンによる日本宣教のはじまりについて論じる。

1. エルンスト・ウーリッヒ宣教師の働き

1.1. 第一次世界大戦までのウーリッヒ

リーベンゼラ・ミッシェンの創設者であるケルバー牧師の自叙伝を記したカート・E・コッホは、リーベンゼラ・ミッシェンの日本での働きの原点はエルンスト・ウーリッヒにあると考えている。

ウーリッヒは一八七五年七月二〇日にハイデルベルクで生まれた。彼の父親はハイデルベルグの高等学校長であった。彼の母親は、彼が幼い頃から主を愛することをその心に植え付けた。一八九〇年代に彼の家族はハイデルベルグのカッペレン・ゲマインデに属していたが、その頃この群れで牧師として働き始めたのが若いケルバー牧師だった。ケルバー牧師は一八九〇年から一八九四年までここで説教していた。ウーリッヒは一〇代後半であったが、このとき、ケルバー牧師と知り合いになった。この時期、このゲマインデにはブルストルのジョージ・ミュラーなど多くの福音的な説教者が来て説教した。ウーリッヒは一七歳のとき、一五歳の妹が病気でなくなるといふ経験をしているが、この出来事が彼にとって信仰の転換点となったようである。彼は大学で神学を学んだ後、マンハイムとラールで副牧師として働いた¹⁰。それから数年間、ネッカチンメルンで牧師をした。

一九一二年の夏、彼はリーベンゼラ・ミッシェンの一員となり、秋にはリーベンゼラ・ミッシェンの南洋諸島の監督として南洋に向けて旅立った。一九一三年一月、彼は南洋諸島の宣教師達を訪問してまわった。現地では宣教師たちの励ましのほかに、ドイツ当局との交渉やカトリックのミッシェンとの難しい懸案事項があったが、彼は身を粉にして奉仕した。

しかし、一九一四年八月に第一次世界大戦が起こった。この頃ウーリッヒは、ドイツ海軍中將グラフ・シュペーから要請されて、戦時下の官吏や乗組員に対する奉仕も行っていた。

日本による南洋諸島の占領は速やかに行われた。八月二三日に日本は日英同盟を根拠にドイツに宣戦布告した。九月三日には南遣枝隊（後に第一南遣枝隊と改める）が編成され、一四日に横須賀を出発。一〇月三

日にはヤルト島攻略、一〇月五日には東カロリン諸島のクサイ島占領、一〇月七日にはボナペ島占領、一〇月一日にはトラック島占領を終え、マーシャル諸島、東カロリン諸島の攻略を完了した。また、九月二日に編成された第二南遣枝隊は、一〇月一日に西カロリン諸島に向けて佐世保を出発した。そして一〇月七日にはヤップ島占領、一〇月八日にはパラオ島占領、一〇月九日にはアンガウル島占領を終え、西カロリン諸島の攻略を完了した。サイパンは一〇月一四日に通信中継艦香取が占領した。¹¹

これがリーベンセラ・ミッシェンと日本の最初の接触であると思われる。この機会にウーリッヒは南洋諸島に來た日本人に伝道を試みた。カルムバッハによると、彼は日本当局の承認を得て、日本本土でトラクトを発行している協会に聖書の分冊やキリスト教文書の送付を要請し、その結果、たくさんの書物が送られてきた。それで彼は他の宣教師達にも配布用に分配した。この費用は、この働きについて聞いた日本在住のあゝるイギリス人クリスチャンが、神から使命として支払った。¹²

しかし、この書物の取り寄せと配布は、当局によって日本語の使用を強制されたことによる措置とも考えられる。ミッシェンによる現地の人々の教育はドイツ語から日本語に変えられたこともあり、かならずしも日本人向けの伝道の意図がすべてであったとはいえない面がある。日本語で書かれたキリスト教文書が、大挙して訪れはじめた日本人への伝道のために用いられた可能性は十分にあると考えられるが、日本語を話すことができなかった宣教師達にとっては、その文書を手渡すことで精一杯であったであろう。

一九一五年一月にはミッシェンの学校が閉鎖された。同年一月にはパラオの宣教師たちが退去命令を受け、一九一六年一月にはトラックの宣教師たちが退去命令を受けた。そして、一九一六年三月八日にサイパンにいたウーリッヒも退去命令を受けて日本に送られることになり、三月一五日横須賀港に上陸した。それから約三ヶ月間横須賀で拘留された。この間、彼は日本側から、自分は戦争に参加しないという書類に署

名するように言われたが、自分が予備役将校の試験を受けていたこともあって、良心的に署名できなかったということが伝えられていた。¹³

捕虜として過ぐす中でも彼は平安に満たされていた。ヘルテル牧師は、ウーリッヒの葬儀の時に、日本海軍の捕虜として過ぐす中で記された手紙を紹介している。彼はその手紙を感謝の手紙と呼んでいた。そこには、主に対する感謝と、南洋諸島の宣教師たちとの親密な交わりに対する心からの感謝が綴られていた。ヘルテル牧師は次のように紹介している。

一九一六年五月一日に彼は、抑留されていた日本の横浜港から一通の『感謝の手紙』を書いた。それはこのような言葉で始まる。『私はこの手紙を感謝の手紙と名付けるのは、誰もここで明確に処刑されなかったからである。』この感謝の手紙で彼はとても快適なことを書いているが、それに関して次のように書いている。『主が私達に与えて下さったのは、たとえそれは既に遠い過去のものとなったものであっても、愛する人たちとの共なる生活、彼らの財産は保たれることである。そう、彼らの財産は永遠に保たれている。神は本質的につかの間のものを与えない。たとえ神の多くの賜物の包みがちりから生まれた人間の子の私達の包みのように消え去るとしても。』

感謝の手紙、彼が捕虜になっているあの時に平安に過ぐす中で書いたあの手紙を読む時、人は言うであろう。それは特別に祝福された時だったと。どのようにして彼は全てのことを感謝し、またほめ讃えることができたのだろうか、特に我々の兄弟姉妹たちのために！シーリング兄について彼は書いている。『私達はボナペで共に兄弟のように暮らしている。私は彼から多くのことを世話になっている。』彼がザイボルト (Seibold) の所に来た時、『愛するクララ姉は私に彼女のきれいで静かな部屋を整えてくれた。』

それはとても良かった。そう、愛する人々のもとにある平安！それはとても心地よいものである！……それからザイボルト兄とともに私は住んだ。机に向かって二時間主の言葉を讀み、そしてひざまずいて祈った。私は島々のほぼ全てのすばらしい、愛する兄弟姉妹たちの声をはっきりと覚えてゐる。祈りの集いで私の耳に聞こえてくる彼らの声の思い出、私はその声を特に敬虔な思い出と呼んでも良いかもしれない。それこそ平安である！……私はどのくらいの愛をボナベでこれらの兄弟姉妹たちから受けただろうか！そしてトラックに向かう。これらの兄弟姉妹たちにもまた、彼は感謝の言葉を見つけた。愛と感謝の気持ちを持って彼はデング（Denge）兄と三人の大切な息子たち¹³を思っていた。それから彼はフロリスに向かい、愛するツベル姉とクラメル（Kramer）の所に行った。彼はしばしばまるでつむじ風のように来たが、いつも喜んで心から受け入れられた。そして愛するトルのアンナ・シュナイダー姉！彼女に対する彼の感謝の気持ちは特に大きい。彼女は独身の男のことをまるで母親のように氣遣い、洗濯や衣服を引き受けた。フェファン島のメーダー兄とベッカー兄に彼は心から感謝を表した。救い主が我々を特にこの戦時に祝福し、準備させた。……今我々は主を、過分の恵みと憐れみをたくさんくださった故に、ほめたたえ、賛美する。主は誠実であり、主は誠実であった。そして主は明日も、今日や昨日と同じであり、永遠に同じである。主は誠実であり続ける。主は御自身を否定できない。我々はこれからも主を信じるので、様々な所で主のすばらしさを見るであらう。¹⁴

このとき抑留された宣教師たちは誰も処刑されたりしなかった。彼はそのことを主に感謝している。政治的な背景としては、宣教師たちの退去処分や残留した宣教師たちの扱いについて国際的な関心が集まり、そのことが日本の対応を慎重にさせたと思われる。¹⁵

ヘルテルの言葉からもわかるように、ウーリツヒと宣教師たちの間にはとても良い関係が形成されていたことがうかがえる。後に南洋諸島で伝道していた宣教師たちの中から日本での拠点づくりに遣わされる者が起こされてくるのだが、主にある兄弟たちの恵まれた関係が既に構築されていたことは、その後になされる日本宣教にとって、良い作用をもたらしたと考えられる。

それから彼は一九一六年六月一日に上海に向かって出発した。¹⁶八月には上海で大学教師の職を得た。一九一九年に戦争は終結した。しかし、日本は一九一九年六月に南洋諸島に在留する全てのドイツ人に退去命令を出し、旧ドイツ領の島々でのドイツ人の宣教の働きをものはや認めなかった。それで彼は他の宣教師たちとともに一九一九年に帰国した。彼は一九二五年までドイツで牧師として働いた。

1・2. 南洋諸島宣教再開とウーリツヒ

① 一九二五年、南洋諸島宣教の再開の知らせ

南洋諸島からリーベンゼラ・ミッシェンの宣教師がいなくなった後も、ドイツでは南洋諸島を宣教地として覚え続け、中国やマヌス島と並んで祈禱課題に挙げられ続けていた。一九二五年の夏、日本が南洋諸島での伝道に再び門戸を開くことが告げられた。一九二五年七月二七日に開かれたリーベンゼラ・ミッシェンの理事会は、小崎弘道の宣教団体「南洋伝道団」の一員として活動し、当面はウーリツヒを日本に向かわせ、当局と宣教団体との交渉にあたらせようとした。¹⁷ミッシェンの機関誌『ヒナス・ミリオネン』一九二五年八月号には南洋諸島での働きの再開を感謝するという一報が掲載され、皆が祈るところとなった。¹⁸彼は当初、

一〇月初旬に出発することになった。¹⁹しかし、実際に彼が出発したのは一九二五年十二月二七日のことだった。²⁰

② 一九二六年、軽井沢で与えられた日本宣教への重荷

(1) 一回目の日本滞在

ウーリツヒはジェノバを経由して、極東の日本に向かった。彼は一九二六年二月八日から一五日まで日本に滞在した。²¹彼の報告によると、この時の滞在は、南洋諸島に向かう船を待つためであった。普通は二ヶ月ほどかかる所、この時は一週間程度で乗り継ぐことができた。八日に門司、下関と立ち寄り、九日に神戸で船を降り、神戸の三宮駅から夜行列車で一四時間かけて東京に向かった。東京ではあおいホテルに泊まった。東京では関東大震災の被害がまだ残っていることが記されている。彼はドイツ大使館を訪問し、南洋庁の長官とも面会した。また、南洋伝道団との交渉も行われた。彼は七〇歳の南洋伝道団の団長で、広く知られたPKOという人物と会食をする機会を得たが、この人物は南洋伝道団の責任者であった小崎弘道と思われる。短い時間ながら、日本当局や宣教団体との交渉を少しでも進めようと努力していることが伺える。この話し合いでは、南洋伝道に関して全て日本から譲られるのではなく、その範囲は一部に留まるが、ミッシェンは伝道の協力者として歓迎され、迎えられることを確認した。²²東京での用事を済ませると、彼はまた門司に戻った。

第一回目の日本滞在報告は、事務的な交渉に比べて、立ち寄った日本の様子の描写が多いのが特徴的である。これは、まだほとんど知られていない日本という国がどのような国であるかを紹介する意図もあったと考えられる。この時点では、神社に関する言及や日曜学校訪問の記述はあるものの、まだ日本宣教への積極

的な思いは見られない。彼は二月一日に日本からミッシェンに手紙を出して日本での話し合いについて報告した。二月一日に彼は日本を發ち、三月一日にトラック島に到着した。²³

(2) 二回目の日本滞在

南洋諸島から日本に戻ったウーリツヒは約二ヶ月間、日本に滞在した。その六月一日から八月二六日にかけての二回目の日本滞在の報告がリーベンセラ・ミッシェンの公文書保管所に残されており、その時の滞在の様子が時間順に日記風に記されている。第二回目の滞在報告は、日本の紹介という側面は後退し、南洋宣教の拠点づくりに関する彼の活動や、彼と関わりを持った人たちに關して報告するという面が前面に出て来ている。

この報告書のタイトルを彼は「一九二六年六月一日から八月二二日までの私の二回目の日本滞在の間にした体験と経験（日本における宣教の働きの始まりの可能性を視野に入れて）」²⁴とし、この報告が単に南洋宣教の拠点づくりのための調査に留まらないことを匂わせた。ここで日本宣教の開始も視野に入れつつ活動した彼の報告の内容を追ってみたい。

六月一日、彼は横浜の地に降り立った。彼を迎えたのは南洋伝道団の岩村牧師と照屋宣教師であった。次の日、彼はブレイスウェイト (Brathwaite) 夫妻を探して訪ねた。ジョージ・ブレイスウェイトは、英国聖書協会編集委員長も務めたクエーカー、ジョセフ・ベヴァン・ブレイスウェイトの次男としてロンドンで生まれた。彼は一二歳で入信し、一八八六年五月二九日、二五歳の時に英国聖書協会の職員として来日した。一八九九年、英国聖書協会の主事を健康上の理由で辞任した後、一九〇〇年基督教書類会社の代理人と

なり、聖書やキリスト教関係文書の出版事業を通して文書伝道に励んだ。また、一九〇一年二月に彼はエリザベス・レースと結婚したが、彼女は日本伝道隊（以下、JEBと表記）の創立に関わった人物で、その伝道を支援していたが、この関係も後にウーリッヒがJEBとの交流を持つ一つのきっかけとなった。

南洋伝道団の関係者以外でウーリッヒのことを知っていたのは、ブレイスウェイトだけだったようである。彼はブレイスウェイトを、以前から唯一私を認めてくれていた人²⁶であったと記している。ブレイスウェイト夫妻もまた、ドイツ人宣教師を日本に送ってくださるように祈っていた。ブレイスウェイトもウーリッヒを歓迎し、彼をサポートした。この二ヶ月の間のウーリッヒの住まいは、ブレイスウェイトもその伝道に協力していた赤坂病院の一部屋であったし、ブレイスウェイトの引越しの後は、彼の住宅が提供された。

六月二〇日の日曜日、ウーリッヒは霊南坂教会の礼拝に参加した。霊南坂教会は南洋伝道団の団長であった小崎弘道が牧師をしていた教会であった。礼拝では小崎弘道の息子、小崎道雄牧師が説教したが、日本語がわからなかったウーリッヒはその説教を理解できなかった。しかし、ウーリッヒは、彼の話し方は、証しというよりは講演のようだったと記している。ここで彼は南洋伝道団の宣教師たちや南洋諸島から日本に來ていた現地の青年信徒たちと会った。また、上海で訪問したことがあるCIMの兄弟たちとも再会した。

午後、ブレイスウェイト夫人と会い、彼女が抱く日本宣教への思いや危機感に耳を傾けた。彼女とは二二日にも話す機会があり、そこでは、おそらくリベラルな信仰の牧師が指導する教会に対する彼女の憤りに耳を傾けた。そのような話を聞いたからか、二二日の記録にはウーリッヒ自身も霊南坂教会に対して、小崎弘道博士は福音を説教するが、教会自体は本質的に聖書の深みがないという批判を記している。しかし、にもかかわらず、JEBがケズィック集会を開くために会堂の使用許可を求めて來た際には、親切にそれに答えたこと、教会の人たちは、その集会に様々な地方から出かけて來た「本当に靈的な」人々がたくさん來て、

内的な喜びに満たされているのを見て驚いていたことも記している。

六月二一日、ウーリッヒは南洋伝道団の会議に参加した。そして、六月二三日、南洋伝道団の岩村牧師とリーベンゼラ・ミッシェンとの取り決めを岩村牧師が英文で起草した。

六月二四日、彼は宣教師たちが日本語を学んでいた語学学校の修了式にブレイスウェイト夫人とともに出席した。この日、ウーリッヒが会うことを望んでいたクェーカーのボウルズ (Bowles) 宣教師と会うことができた。その他にもここで多くの宣教師たちや日本人と知り合ったが、多くの人と個人的に接触を図っていくことがミッシェン側に誤解を与えると考えたのか、自分の思うことは南洋諸島での働きであって、日本の宣教の開始ではないとわざわざ断っている。後に、ここで知り合ったダービー派のコール (Kohl) 宣教師のもとを恵比寿に六月二八日に、そして、翌日二九日にアドベンティストのドイツ人宣教師 A・コッホ (A. Koch) 夫妻を大井町に訪ね、交わりを持った。

六月二五日、彼は住まいを赤坂病院に移した。赤坂病院は、現在の日本キリスト教団赤坂教会の前身にあたる施設で、ホイットニーによって一八八八年にキリスト教精神による慈善病院として開設された。病院としては、眼科と普通科があり、看護婦の訓練も行った。また、病院内で定期的に礼拝や祈祷会が持たれ、伝道婦が病院内外で患者を巡回した。ブレイスウェイトはホイットニー夫人の実弟であったので、夫妻で病院内での伝道や礼拝に協力していた。ホイットニーは一九一八年に亡くなり、病院の業務は停止していたが、宣教活動は続けられ、診療室や待合室などを用いて礼拝や聖書研究会、祈祷会などが持たれた。ウーリッヒが滞在したとき、ホイットニー夫人やブレイスウェイト夫妻らによって宣教が行われていた。ウーリッヒはこの病院の二階の部屋を使うことができた。

この病院には JEBB の伝道者、宮村伊三郎の家族も住んでいた。病院では毎朝、宮村兄が五〜六人のクリ

スチャンたちの集会を導いていた。七月一日の文章でウーリッヒは、言葉はわからなかったが、彼の証しや賛美にとっても強められたと記している。また、宮村夫人は洗濯の世話などをしてくれたりして、家族ぐるみで彼の日本での生活をサポートしたようである。宮村家との交わりや彼の細々とした必要を満たしてくれた基督教書類会社の兄弟たちと交わりの中に、彼は、お世辞ではなく、兄弟愛があった。私は日本に感謝する。全ては救い主による。²⁷と記している。

六月二六日、午後、ウーリッヒはポールズ宣教師を訪ね、南洋のことに關して話し合い、助言や教えを受けた。ポールズ宣教師は一九〇一年に夫人とともにフィラデルフィア友会宣教師として派遣された。彼は普連土女学校理事長として経営に尽力し、日本キリスト友会の組織化にも貢献した。また、日本友和会などを通して平和運動も推進した。六月三〇日には、ポールズ宣教師が創設した Foreign Section of the League of Nations Association in Japan という組織の会議に出席した。一五人ほどの小さな会議ではあったが、南洋伝道団と政府との交渉について講演と質疑応答の時間が持たれた。また、七月一日には普連土女学校と思われるクエーカーの女学校にも共に出かけ、七月五日には通訳を介して生徒たちの前で講演した。

六月二七日の日曜日は、赤坂病院内で行われていたホイットニー夫人の聖書クラスに出席した。その後、スカンデナヴィア伝道協会のアンダーソン (Anderson) 宣教師と会った。ウーリッヒはアンダーソン宣教師を靈的に高く評価している。夜七時半からは病院内で持たれた証しの集会に参加したが、言葉はわからないながらも、その小さな群れの親密で深い共同生活に感銘を受けている。

六月二八日、ウーリッヒはブレイスウェイト宅で午後三時から持たれた JEB の人たちの集会に参加した。この集会は日本人伝道者と外国人宣教師による祈りと御言葉の集会であった。ウーリッヒはこの集会で JEB に強い関心を持ったようである。彼の目に彼らはとても生き生きと見えているように見えた。また、外国人

は何かを与え、日本人は受け取るというような関係が全くないということに感銘を受けた。それで、JEBのパゼット・ウィルクスの著作やこの団体が出しているいくつかの雑誌を取り寄せ、どのような働きをしているのか知ろうとし、どの書物かは特定できないが、二冊の小冊子にも目を通すよう、理事会に提案している。

この集会には、後にリーベンゼラ・ミッシェンの宣教師たちが大いに助けられることになるオーバ(Ooba)氏も同席していた。ウーリッヒによると、彼はJEBのアソシエイトで、ヘフジバ・ミッシェン(Hephzibah Faith Mission)のメンバーであった。回心前は、旅行会社で外国人ガイドとして働いていた。彼はドイツ語ができたので、ウーリッヒは共にルター訳の聖書を読んだり、鎌倉への観光に出かけたりするなど交わりを持っている。

このオーバという人物は、横浜谷戸福音伝道館の伝道師をしていた大庭芳太郎(図三)であると思われる。横浜谷戸福音伝道館はヘフジバ・ミッシェンの米国人宣教師スメルサー(Fr.J. Smelser)によって一九一二年(明治四五年)四月に、当時の中区南太田町庚耕地一五五一番地に設立された。²⁸当時の中区南大谷町庚耕地は現在の南区庚台である。『日本キリスト教歴史大事典』によると、ヘフジバ・ミッシェンは一八九三年(明治二六年)にアメリカのアイオワ州西南部のミヴーラ河沿いのテールボルで、ドイツ系敬虔派の移住者たちの中に起こったリバイバルによる宣教団体である。ヘフジバとはイスラエル王マナセの母親の名前(第二列王記二一・一)で、「わたしの喜びは、彼女にある。」(イザヤ六二・四)という意味である。一八九四年(明治二七年)にスメルサー宣教師が来日してから、横浜、銚子、佐倉、潮来などに伝道館を開設したが、一九二五年(大正一四年)に東洋宣教会日本ホーリネス教会に加入した。²⁹

この地域は俗称で乞食谷戸とも呼ばれたスラムであった。スメルサー宣教師が一九一八年(大正七年)に

帰国したあとは、大庭芳太郎がこの伝道館の管理人ともなった。最初の所在地が神奈川県によって買収され、移転を余儀なくされるなかで関東大震災が起こり、建物の建材がほとんど全部被災民に持ち去られるということも起こったが、一九二四年二月には南太田町庚耕地一三五四番地に新会堂を建てることができた。伝道館は、この地に学校ができるまでは貧民夜学校としても用いられた。伝道は困難で信徒の数も多くはなかったが、一九三一年（昭和六年）の時点で、伝道館設立以来、救われて昇天した者の数は四〇名にも達した。³⁰

六月二九日、ウーリッヒは東京にある横浜正金銀行に口座を開いた。

七月一日、ブレイスウェイト夫妻が家を出たので、ウーリッヒはその家に移り住んだ。その後、ボールズ宣教師に会い、それから、三〇日の会議で知り合った日本人の青木氏の事務所にいき、話し合った。彼は先の会議で、南洋におけるミッションの働きに大きな関心を示していた。後日、彼を通してウーリッヒは日本の南洋行政機関に関する書物を手にすることができた。この事務所に、ボールズ宣教師を通してウーリッヒのことを知った日本基督教連盟 (National Christian Council of Japan) の宮崎牧師³¹が訪ねて来て、彼と交わりを持った。

七月二日、彼はカンツァー・シュルツェ (Kanzler Schultze) 姉を訪ねた。

七月三日、彼はキリスト教書類会社を訪ねた。キリスト教書類会社は今で言うキリスト教書店で、聖書や神学書、品物を販売していた。彼は日本の書店に比べると、聖書の売れ行きを除いて中国の書店はとてみすばらしいと感想を記している。そして、この書店は聖書的にしっかりとした書物を提供していると記している。また、この書店で働いていた日本人、Toda と Sumiya とは交わりがあったようである。Sumiya は隅谷巳三郎のことと思われる。

七月四日の日曜日、彼は赤坂病院で聖書クラスと礼拝を持った。この日は子供伝道会も開かれていて、JEBの青木という伝道者が奉仕していた。この伝道者は青木幹太という児童伝道者であると思われる³²。午後、霊南坂教会に小崎弘道に会いに行ったが不在で、小崎道雄牧師夫妻に会った。

この日の記述には、魂の救いよりも社会的な働きを優先する牧師に対する批判が綴られている。また、ある日本人作家の「日本は祈りを必要としている国ではない。国自身が神的なのである。」という言葉や、神道擁護者の言葉として、「道徳律は中国で発明されたが、それは道徳のない民族だからで、日本には必要ない。どの日本人も心に問えば正しい振る舞いをする」という考えを紹介し、日本人の性質の中に、国家的な傲慢さがあると指摘した。日本人に関しては、七月九日にも言及がある。それによると、日本人が支配されている第一の欲求は、成し遂げよ、というものであり、現代日本人の典型的な特徴であるが、ルカ一四章二八節から三〇節にある教えはそうあることを許さないと指摘している。

この日の夕方、小崎道雄牧師の要請で、霊南坂教会で伝道説教を通訳を介して行った。テキストはヨハネ七章三七節から三九節であった。帰る途中、赤坂病院に寄り、子供伝道を終えた兄弟姉妹たちと交流の時を持った。

七月六日、この日彼は日本語の勉強をしようとしたが、他にやることがたくさんあってできなかったことが記されている。そして語学は宣教師にとってとても重要であることを、ハドソン・テラーによる指摘や、ブレイスウェイト夫人の指摘の例を挙げつつ述べる。また、語学学校の修了式で、日本で三〇年以上働いた宣教師が、はじめに日本語はやさしいと思い、良い基礎を築かずに働きに入って、後にとても苦労したという話しをしていたことを紹介している。それから彼はブンカン (Buncombe) の日本語学校について詳しく紹介している。

午後、彼は大庭芳太郎とともに横浜に行き、“yawatamaru”の船員を訪ねた後、同じく横浜にあった独逸海軍病院のシュラム (Schramm) を訪ねた。南洋のミッシェンの書物はここに保管されていたようであるが、関東大震災によって建物は崩壊し、腐るか焼失してしまったと記されている。

七月九日、彼はYMCAに行き、ポールズ宣教師によって知り合ったアメリカ人ルーファス・ジョーンズ (Rufus Jones) のクエーカーの歴史に関する講演を聴いた。この講演会には南洋伝道の岩村牧師や、後に軽井沢で話すことになるメソヂストの鵜崎監督も出席していた。

七月十三日、ウーリッヒは大庭芳太郎と会い、交わりを持った。彼らはルター聖書を読み、互いの働きについて話し合った。リーベンゼラの方針についても話し合ったが、それは彼が属しているJEBとも一致した。彼らはこのとき互いの信仰の立場が同じであることを理解したと思われる。大庭芳太郎が横浜のスラム街で行っていた伝道に関して、ウーリッヒは、ドイツのゲマインシャフトのような働きだという印象を持った。この話し合いを通してウーリッヒは、リーベンゼラの兄弟たちから何人かをJEBの働きに加えることができないだろうか、と考えた。しかし、別の問いが生じた。それは、外国人宣教師は言葉、習慣などをはじめに身につけるが、現地人の伝道者と同じくらいにマスターするということは決してないし、そもそも彼のような伝道者が伝道している国で、外国人宣教師が伝道する余地があるのだろうか、という問いだった。

七月十四日、彼は日本の教育界で大きな影響力を持ち、成城学園を設立した澤柳政太郎博士と日本クラブで会食し、南洋のことやウーリッヒの故郷のことを話し、小さな証しもした。

七月十五日、ウーリッヒは矢内原忠雄から手紙を受け取ったが、とても喜んだことが記されている。矢内原はドイツ語を話したので、彼らは祈りの交わりを持っていた。³³

七月一六日、夜八時半、霊南坂教会の祈祷会に出席した。

七月一七日、ウーリッヒは大庭芳太郎と会う約束をしていたので、横浜に出かけた。大庭芳太郎はスラム街ではない別の場所でも子供伝道をしていた。その場所では貧しい子供たちのための学校も開かれていて、約一四〇人の子供たちが集っていた。ウーリッヒはその学校の教室で開かれた伝道集会を見学した。

七月一八日、日曜日、彼らはスラム街の小さなバラック小屋の教会に出かけた。そこには一〇人のクリスチャンたちと三人の受洗者が集っていた。ウーリッヒは日曜学校で話した。夕方は路傍で説教した。

七月二一日、ドイツの神学者カール・ハイム(Karl Heim)から紹介された東北学院の笹尾糸太郎がウーリッヒをたずねてきた。それから彼らは大森の矢内原忠雄を訪ねた。ウーリッヒは大庭芳太郎の横浜での働きに触れた後に心にくすぶっていた疑問、すなわち、日本人ではない外国人宣教師が、日本語や日本人の習慣を不十分な形で用いながら、日本人クリスチャンたちの働きに近づくことができるのだろうか、またそもそも日本人に福音で仕えることができるのだろうか、という疑問を矢内原に問うてみた。彼は、はい、と答え、外国人宣教師の必要性を肯定した。しかし、同時に、暑い夏の間、日本人の多くはその場に留まるのに対し、外国人宣教師は街を逃れて軽井沢などに行ってしまうことを指摘して、その結果、社会の中で異物のように思われ、人々には不快感があるかもしれないと述べた。

ウーリッヒは矢内原に、内村鑑三を訪ねたくはないか、と聞かれた。彼は一九二六年五月以来、内村が刊行していた英文雑誌 *The Japan Christian Intelligencer* を購読していた。内村は忙しいだろうと思ったウーリッヒはその誘いを断った。しかし、矢内原は、彼はウーリッヒの訪問を喜ぶだろうと言うので、彼を通して都合を問い合わせることになった。矢内原の返事ははがきで金曜に來たが、それによると内村は喜んでウーリッヒを迎えるということだった。

七月二二日、ウーリッヒは茅ヶ崎の近くに住む小崎弘道のもとを訪問した。彼は南洋諸島でリーベンゼラ

が計画した女学校について、南洋伝道団の働く領域からも入るようになるという確約を小崎から受け取った。それから、大磯に向かい、パゲット女史 (Mrs. Paget) に会ったが、彼女との会話から、彼は彼女をクリスチャンではなく、'KirchenChristin'、つまり国教会クリスチャンだと思われる、と記している。しかし、その判断基準は記されていない。その他にマルガレーテ・カネンベルク (Margarete Kannenberg) 姉とその主人に会った。

七月二五日、ウーリツヒは、アンダーソン宣教師と赤坂病院で会った。午後二時に矢内原と大久保駅で会い、内村鑑三を訪問した。彼らは二時間に渡って互いに話し合い、良く理解し合ったとウーリツヒは記している。

この訪問について内村は、彼の日記に次のように記している。

「今日も亦珍らしい外国宣教師の訪問を受けた。彼は我が南洋委任領土に伝道する独逸宣教師エルネスト・ウルリツヒ君であつた。厚い福音的信仰を有し、さすがは独逸人丈けありて教養深く、博き同情の人であつた。一面して主に在る愛すべき兄弟であることが判明つた。依て此機会を利用し、世界伝道協賛会を代表し、小額の寄附を為して、我等に代わつて南洋人に伝道して呉れるやうに彼に依頼した。美はしき信仰的交際であつた。ウルリツヒ君の容貌までが南洋土人化してゐるを見て感激に堪えなかつた。宣教師たる者は斯くあらねばならぬ。日本にも斯かる宣教師が欲しくある。」⁹⁴

概して宣教師に対しては厳しい意見の持ち主である内村鑑三が、ウーリツヒに対しては最大級とも言える賛辞を送っている。ウーリツヒは内村の考えに全面的に賛同を示すわけではないが、宣教師の問題について

は意見を同じくする素地はあった。例えば、この後ウーリッヒが参加する軽井沢の宣教師たちのカンファレンスでは、多くの面識を持たない宣教師たちと共に過ごすことになるが、その際彼が気持ちの中で持っていた姿勢は、私の前にいる会議の参加者が神の子かこの世の子かしばしば知らなかったため、……何回も内面的に探りを入れることだった³⁵し、主催組織の議長によるカンファレンスの開会礼拝説教に対しては、兄弟姉妹たちは、説教が福音的でなかったにもかかわらず、感謝の言葉を言った。たくさんの宣教師たちや婦人宣教師が日本に来るが、自分自身が回心しておらず、宣教の働きが何であり、また彼らがどのように行うべきかということを知らない³⁶と痛烈に批判している。このような宣教師に対する見方は、内村のそれと共通しているように思われる。

また、一九二二年一〇月に、世界の伝道のために祈り、献金をささげて貢献するべく世界伝道協賛会という組織を作っていた内村は、南洋伝道のためとして、ウーリッヒに献金を渡した³⁷。ウーリッヒはその額を約一〇〇円と記している。

七月二九日、ウーリッヒは、岩村牧師の家に食事に招かれた。彼はここで、客としてある家に行ったら、その家で与えられものの三分の二の価値のあるものをその人かその家族に送るか、後で持ってくる。もしそうしなければ友好的と見られないという日本の礼儀の習慣を学んだと記している。彼はこの習慣を知って、いつも世話になっている人に贈り物をしようと考えた。また、日本を去る際にも、世話になった人に贈り物をした。ウーリッヒは日本の習慣をすぐに身につけ、自分の生活の中で応用した。

七月三一日から八月五日まで、ウーリッヒは軽井沢に出かけた。八月一日（日）から四日（水）にかけて、Federation of Christian Missions in Japan という組織の年会議が同地で開催されたが、彼もそれに参加した³⁸。ウーリッヒはここで七人の宣教師たちと良い交流を持つことができた³⁸と記している。カンファレンス全体の

テーマは“The Unfinished Task”だった。ウーリッヒの日本宣教に対する重荷は、この会議への参加を通して明確なものとなった。

八月三日、日本で約四〇年間宣教しているカナダ人宣教師J・G・ダンロップ (John Gaskin Dunlop) が「地方伝道における宣教師」と題して行った講演(卒業論文の付録に全文掲載)は、ウーリッヒにとって重要な講演となった。この講演によって彼は、地方で働きを始めるという考え、特に中小の街で始めるという考えを強められた。報告書には、講演の要約が付記された。カンファレンスのなかでは、当時日本メソヂスト教会監督で、このカンファレンスにはゲストスピーカーとして招待されていた鵜崎庚午郎とも会談の時を持ち、日本に宣教師を置くことが必要かどうかを話し合った。彼はその問いかけに対し、開拓の働きのために、また既に開拓された新しい地方のため、海外からの宣教師をとる必要としている、と答えた。

Kochは彼がこのカンファレンスで、日本人の漁民や農民への宣教に対する刺激を受けた。⁴⁰と書いているが、この報告書では直接的に農漁村伝道という言葉は登場していない。しかし、地方の人口統計や職業人口にも興味を示し、また、地方においてまだまだ福音が届いていないことを伝える宣教師達の話に掲載するなどしていることから、ウーリッヒが地方伝道を考えていたことは間違いないと思われる。

八月六日、ウーリッヒは軽井沢から一四時間かけて山形県鶴岡市に向かい、八月一〇日まで黒崎幸吉宅に滞在した。ウーリッヒと黒崎幸吉のつながりは、内村鑑三や矢内原忠雄などの無教会の関係者によるつながりではなく、ウーリッヒの知り合いであったドイツの神学者カール・ハイムによる推薦であったことが記されている。黒崎はドイツのチュービンゲン大学に留学した時にハイム教授と親交を結んでいた。当時黒崎は留学から帰って来た後に、郷里の鶴岡で伝道していた。

ウーリッヒは黒崎の開いていた集会で証しする機会が与えられた。彼は日曜日の礼拝にも参加した。また、

聖書の学びの時間には、ウーリッヒは着物と袴をはき、座布団に座って学んだことが記されている。黒崎の話したことからしては、教職の報酬について、日本人はとも少ないが、一方で外国人宣教師たちは豊かな給料をもらっている。彼らはそれでも物価が高くなり、以前の生活ができなくなって、今や日本から撤退している、ということを行ったことが記されている。ウーリッヒが鶴岡を去った後、黒崎から手紙が来て、鶴岡での伝道の様子を知らせて来たことが記されているので、この後も祈りの交わりは続いていたと思われる。

八月一五日、ウーリッヒは内村鑑三宅で開かれた集会で、矢内原忠雄の通訳によって話した。しかし、内村は不在であった。

八月一七日、ウーリッヒは茅ヶ崎の小崎弘道宅を訪ね、そこで岩村牧師とも会った。南洋伝道について、リーベンゼラは南洋伝道団のもとで働いているが、現地の宣教師ではなく、日本の南洋伝道団の管轄下に置かれたことを話した。また、山口宣教師と照屋宣教師の地区から、少女たちがウドトのシュベスター・エリーゼ (Elise) の学校へ来ても良いということ話を話した。

八月一八日から、日本を旅立つ準備が始まり、買い物や荷造りのこと、基督教書類会社の人たちや大庭芳太郎が手伝ってくれたことなどが記されている。横浜を立った後、神戸、門司に立ち寄って、何人かの日本人の兄弟たちに会ったことが記されている。

この報告の最後のまとめの部分で彼は次のように記している。私にはとてもありそうなこととして、そう、きわめてありそうなこととして、日本での働きが開始させられるように思われる。⁴¹ また、その場所としては、南洋のためには、横浜からあまりに遠い所は外すべきであろうと私は考える。帰国者の船は門司でもなく神戸でもない。そこは横浜から急行で一二時間から一四時間かかる。おそらくキリストは私たちに本州南側の真ん中を私たちの働きと考える⁴²と記している。

本文が終わった後、北海道を除く日本の各県の人口や気候についての詳細な統計が加えられている。

日本滞在を終えたウーリッヒは、南洋に戻った。ウーリッヒは一九二六年二月一〇日と一九二七年三月一日に、トラック諸島を巡回した様子を報告した。何人かの宣教師たちがこの年のうちに南洋に渡った。

2. 一九二七年、リーベンセラ・ミッシェンによる日本宣教開始の年

2・1. ミッシェン理事会の動き

一九二六年七月三〇日、ミッシェン理事会では、日本滞在中のウーリッヒから送られてきた南洋伝道団との仮協定と彼の報告が朗読され、承認された。⁴³ 一九二七年三月一八日の理事会では、レンゲとヨスヴィクを南洋に派遣することに決め、シーリングにはミッシェンのための拠点を開設するためにこれらの兄弟たちとともに日本へ行くかどうかを問い合わせることになった。⁴⁴ 理事会の議事録において、日本におけるミッシェンの拠点開設について言及されるのはこれが初めてである。そして同日、主は日本を我々の心に置いた。

我々は主がどのような伝道の働きをそこで任せられるのかを探り、見いだしたい。⁴⁵ と決議し、リーベンセラ・ミッシェンは日本宣教を主から与えられた使命として考え始めた。一九二七年四月二〇日と二一日、南洋諸島へ遣わされたメーダー宣教師による、日本に関する印象を記した手紙が読まれたが、彼は日本宣教の開始を推薦した。⁴⁶ この支持は、既に日本宣教を決定していたミッシェンにとっても励ましとなったであろう。

2・2. シーリング宣教師たちの派遣

アダム・シーリング宣教師 (Adam Syring 図四) は一九〇七年にリーベンゼラ・ミッションに入り、一九一〇年から九年間、南洋諸島のポナペに遣わされていた宣教師であった。帰国してからはドイツ国内のミッションの支援者グループを訪問してまわったほか、クリスチャン・エンデヴァーの青年担当として国内を巡回する奉仕をしていた⁴⁷。しかし、一九二七年になってミッションから日本での働きを要請され、彼は他に二人の宣教師たちとともに派遣されることになった。

一九二七年六月五日、ペンテコステの日にリーベンゼラで開かれたペンテコステ大会で、シーリング宣教師たちの派遣会が行われた。その時シーリング宣教師は、詩篇一一七篇を開いて次のようなスピーチをした。

すべての国々よ。主をほめたたえよ。すべての民よ。主をほめ歌え。

その恵みは、私たちに大きく、主のまことはとこしえに至る。ハレルヤ。詩篇一一七篇

この短い詩篇は聖書の真ん中にある。それは旧約と新約の中心であり、神の完全な救いのご計画の中心であり、我々の宣教の働きの中心である。全ての国々は神をほめたたえ、全ての民は神を賛美するだろう。黙示録七章一〇節は実現しつつある。この大きな、すばらしい讃歌に、私たちは読んだように、全ての国々、全ての民が招かれている。多くの人は、国々は回心しないか、回心することができないと考えているが、彼らのために、より良い恵みの時がもう一度来るだろうか。未開社会の無知と不道德の中にあって、この見解を証明する長い宣教の働きにもかかわらず、人は信じる。西洋の国々は東洋人よりも多くの点でまさっているかもしれない。しかしそれは回心するのに障害とはならない。聖書は、知

者などは多くはないと言っていないだろうか（第一コリント一・二六、二七）？そして国々の道徳的低さに関して私たちはマタイ二一章三節bを考えたい。しかし、私たちが宣教の成果について判断したい時は、ツインツェンドルフ（Zinzendorf）の忠告「魂をヘルンフートの尺度エレで測ってはならない！」を思い出させたいと思う。この「ヘルンフートの尺度エレ」はヘルンフートにとってはとても良いものであったが、しかし、アメリカインディアンにとってはそうではなかった。そしてそれは「リーベンセラの尺度」にもあてはまる。シュベスターたちの衣服が膝の辺りまでである時、それはきわめて無作法であろう。今は、地面から一五センチのところにさせるのが「リーベンセラの尺度」の基準である。それはとても良いことである。私は二人の妻を持っていた南洋の島民を知っていたが、彼が回心した時、彼は一人を去らせなければならないということを求められた。そうしなければ、彼はゲマインデには受け入れられなかった。彼はどちらを去らせるべきか？どのようにして子供たちと暮らすのか？私は、一夫多妻制に対して私たちは戦わなくてはならないと信じているが、このケースは間違った尺度で測られていた。

主をほめよ、全ての国々よ！しかし、彼らが主を知らないで、どのようにして主をほめ讃えることができるのだろうか？それゆえに、私たち宣教師は、貧しい国々のためにこの偉大な主を伝えるために外に出て行くのである。それは私たちにとってすばらしい使命である。外国の地に行くために、今、私の子供を残さなくてはならないということを私は軽くは考えていない。しかし、ある人がこう言ったとき、国々の苦しみを見て、また、あまりに大きな、そしてすばらしい任務を見て、私はその深さを良く理解することができた。

高すぎる犠牲はない。

重すぎる道はない。

あなたの炎をまき散らすために

荒れに荒れる海に⁴⁸

私はこれから日本に向かっていく。私たちは南洋伝道のために拠点を必要としている。私は横浜のあたりに購入するか、借りるか、建てるかのいずれか一番良い、あるいは安い方法で一軒の家を得る許可を（筆者注…理事会から）得ている。そのあと、主の御心ならば、私は島の人々が期待しつつ長く待っているポナペ語の新約聖書の改訂をするつもりである。これらの働きをしながら、いつでも日本人に福音を伝える機会を用いたいと思う。なぜなら、日本は宣教師を求めているからである。日本には福音を知らない三六〇〇万人の農民がいる。彼らもまた福音を聞くであろう。そして彼らはすばらしい主の栄光を讃える大きな賛美の歌に加わるであろう。

あなたがたは、しかし、あなた方の家にとどまり、あなた方の兄弟シーリングのために祈り、願いを求めている。⁴⁹

このスピーチからわかるシーリングの南洋における宣教姿勢はどのようなものだろうか。彼はヘルンフォートの兄弟たちによる世界宣教の原則を受け継いで、「リーベンゼラの尺度」で宣教地を測る誤りを避けようとした。それは例えば、一夫多妻制の南洋諸島の文化の中で信仰を持った者に対して、一人の妻と子どもを去らせるようなことは間違った基準の適用のしかたであるとしている。これは、福音宣教によって生じる信

仰生活の中に、自国の文化的なものが入りやすいことを認識していたからであろう。けれども、自国のほうが宣教地よりも優れていると考えていたともとれる言葉も見られる。

彼の主張をまとめると、宣教地は未開社会であり、知識的に、道徳的に低い状態だが、回心の障害にはならないということになる。この主張において彼が注目していることは、自国の文化的な優位性ではなく、宣教地の文化的・道徳的状況がどのようなものであっても、福音宣教によって回心者を得るのに障害とはならないという点であると思われる。

中山和芳氏の研究によると、リーベンセラ・ミッションの前に南洋諸島で宣教していたアメリカン・ボードは、その布教活動に関して、布教の対象を西洋化、文明化させてから福音を伝えるのか、ただ福音を宣教してその対象をキリスト教化することを活動の目的とし、その後の生活は現地の人々に任せるのか、ということアメリカ・インディアンやハワイにおける彼らの宣教を通して議論してきた。南洋諸島におけるアメリカン・ボードの本部の布教方針はキリスト教化であったが、現地のコシャエ（以前のクサイ島）とポーンペイ（以前のボナペ島）では文明化が行われ、宣教師たちは現地の習慣や伝統文化をキリスト教と調和するものに変えようとした。リーベンセラ・ミッションが南洋諸島に入る直前の一九世紀の終わり頃には、アメリカン・ボードはキリスト教化という方針を放棄し、文明化を宣教方針としていた。⁵⁰このような背景を持つ宣教地を受け継いだことも考慮に入れると、現地を既に知っているシーリング宣教師の言葉は、キリスト教化という理想論を掲げつつも、文明化という現実論の必要性も認めているように思われる。

彼の宣教師としての重荷がどこにあるのかということも注目に値する。彼にはボナペ語新約聖書の改訂という使命があったが、さらに日本に対する使命が加えられた。この時点で既に、南洋宣教の拠点として、横浜の辺りに住居をかまえることが計画されている。その理由は既にウーリッヒが示したように、横浜が南洋

の玄関であったからであると考えられる。そして、この拠点開設の働きの他に、福音を知らない三六〇〇万人の農民に福音を伝える使命があった。しかし、農民を視野に入れた地方宣教がどこでなされるのかは明確ではない。それでも、彼にはいつでも日本人に福音を伝える機会を用いたいという願いがあった。このように、リーベンセラ・ミッシェンから初めて日本に遣わされる宣教師たちには、横浜に南洋宣教の拠点となる家を持つこと、そして、日本の中でも、特に地方の人々に福音を伝えることの二つが大きな使命として課せられていた。

2・3. ウーリツヒによる「私の第二回目の日本滞在にした体験と経験」の結論

ウーリツヒは、二回目の来日に関する報告書を提出した後に、その結論に関する別の文書をトラック島で作成した。それが「私の第二回目の日本滞在にした体験と経験」の結論⁵¹という文書である。この報告書の日付は六月一〇日となっているので、シーリング宣教師たちの派遣式の五日後に作られたことがわかる。シーリングのスピーチではまだ日本において具体的な宣教の地名は示されていなかったが、ウーリツヒはこの報告書で福音を伝えるべき宣教地として、どこで、どのような人物が、どのように働きを始めるべきかについて、彼の見解を記した。

彼はまず、ヨシュア一三・一「まだ占領すべき地がたくさん残っている。」と、マルコ一三・一〇「こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。」という二つの御言葉を示す。それから、クリスチャン人口がプロテスタントとカトリックを合わせて全人口の一／二（〇・五％）か一／三（約〇・三％）と推測する。そして、宣教の状況は、中小都市や農村での働きは停滞し、外国人による働き

は撤退していて、実際の宣教の働きは不足しているほか、福音的ではない外国人や日本人の働きが福音を空しくしている、と指摘している。

彼は、ドイツ人としては、今までドイツのミッシェンは日本での神の言葉の働きに活動的ではなかった。敬虔なドイツのクリスチャンは、この民族のために、異教徒の国の中でも第一の大国になるかもしれない民族、ドイツ人からとても多くのことをまっすぐに学んで受け入れている民族のために、ドイツ人の名前のドイツ出身の幾人かのアメリカ人が日本での宣教の働きの列に加わってはいたが、しなかったも同然であった⁵²と告白する⁵³。また、日本人の外国人に対する感情は、中国で知られているような外国人排斥は日本ではない。二つの民族はとても違っている⁵⁴と述べ、外国人は受け入れられやすいことを指摘した。

それから彼は日本宣教に関する彼の意見を述べ始める。ミッシェンも大筋として地方伝道を考えていることを確認した後、宣教すべき地として埼玉県を挙げる。その理由は東京から近いからであった。彼は、私達の南洋での働きと関連する業務を考えて私が思うのは、私達は横浜から遠くないところ、ないしは本土中央の南側を離れるべきではないということである⁵⁵と述べている。もう一つの理由は、外国人の働きがほとんどなされていないからであった。彼の手元にあった記録では、当時埼玉県で開拓していた外国人は二人だけであった。一九二六年の夏に軽井沢に行った時、彼は鉄道で埼玉県を通った。それで東京からの鉄道網により、もっとも遠い所でも二時間から三時間半で到着できることを知っていた。また、彼は地図上で人口二万ぐらいまでの中小都市に注目している。

埼玉県以外の土地としては、彼は新潟と山形の名を挙げている。しかし、山形県では黒崎幸吉の協力が得られる可能性を示しつつも、東京からの距離があまりにも遠いことを記すなど、積極的な支持はしていないように思われる⁵⁶。

日本に遣わされる宣教師については、最初から働きの場所に定住するのではなく、定評のある語学学校、例えば彼が修了式に出席したブランクの学校の一年コースか二年コースで徹底的な訓練をして、日本語を習得すべきであると主張している。JEBの人たちや、彼自身の意見では、日本語の徹底的な習得は教会の働きの必要不可欠な前提であった。

彼の計画は次のようであった。この時点で既に、東京の日本の兄弟がその近郊で家を探して⁵⁷いた。来日した宣教師たちは、その家からまず一年語学学校に通う。そして、語学の学びと同時に、ウーリッヒと関係のある日本人の働き人の宣教を手伝って、日本宣教に関する認識や日本人の国民性、特質を知る機会を見いだす。ウーリッヒによれば、この方法はC I Mでも採用されている方法であった。協力を要請できる日本人の働き人としては、ウーリッヒは大庭芳太郎の名を挙げている。ウーリッヒは、まず日本人クリスチャンやその群れとの親密な接触を持ち、その上で地域住民への伝道を考えていたようである。クリスチャンへの接触が先に来る理由は、そうしないと、日本人としての自己意識が強い住民の大部分のドアを、はじめから閉ざしてしまふことになるだろう。⁵⁸と考えていたからであった。今後のこととしては、彼は語学学校に通う時間を短縮するために、後に、有能で語学の専門知識があり、また教える賜物を持っている宣教師またはシュベスターを持つべきである。⁵⁹とも進言している。

遣わされる宣教師の資質については、第一に、御霊の資格と主の明確な召し⁵⁹であるとしながら、メーダー宣教師の、私達は博士号を持つ博士ではなく、より良い大工、家具職人、農家の人を必要と⁶⁰しているという意見を紹介する。そのような働き人の例として、大庭芳太郎を挙げ、彼は無学な人であり、大学教育を受けていない⁶¹と指摘している。ドイツ人を待っているのは、普通の日本人⁶²であった。しかし、日本語習得の能力は必要とされた。けれども、彼は、主は彼らが以前には持っていなかった能力を与えるこ

とがおできになるとも期待している。このように、ウーリッヒが思い描く宣教師の資質は、特別な神学教育を受けた人物というよりは、主の召しを受けて訓練された普通の人物であった。

宣教地での住宅建設の可能性については、職人らの手によるか、自分たちの手によるかは検討中であることが示されている。

以上のことをまとめると、ウーリッヒの考えていた日本宣教は、宣教地としては埼玉県の人口二万ぐらいの中小都市とその周辺の村々を考えていた。遣わされる宣教師は、神学博士号を持つような高学歴の人物ではなく、普通の職業人であることが望まれるが、なによりもまず主の召しが明確であることが必要であった。宣教の始め方としては、いきなり宣教地に入るのではなく、まず語学学校に通って日本語を徹底的に習得すると同時に、日本人クリスチャンとの交わりを持ち、日本人の働き人の宣教活動を手伝いながら、日本人と日本宣教に対する認識を深めることを目指すものであったといえよう。

実際に宣教師たちが来日したあと、宣教の始め方は計画に沿って進められた。しかし、実際の彼らの宣教活動は埼玉県ではなく、横浜や東京周辺でなされることになる。

2・4. 一九二七年九月一日、シーリング宣教師たちの横浜到着

シーリング宣教師たちが遣わされた時、彼らの年齢は、シーリングが四四歳、ヨスヴィクが三〇歳、レンゲが二八歳であった。彼らは一九二七年七月二六日にジェノバから乗船し、上海を経由して九月一〇日に神戸に到着した。神戸からは列車で横浜に向かい、ウーリッヒと大庭芳太郎が彼らを迎えた。それは九月一日のことだった。リーベンゼラ・ミッシェンではこの日を、日本におけるリーベンゼラ・ミッシェンの宣教

の働きの始まりの日としている。⁶³

2・5 大庭芳太郎牧師の献身的な援助⁶⁴

九月一日に横浜に到着した宣教師達は、まず上恩田⁶⁵にある大庭芳太郎牧師の家に案内され、そこに泊まった。上恩田という場所は、現在の横浜市青葉区あかね台一丁目付近と思われる。当時、この辺りは横浜線長津田駅を最寄り駅とした地域であった。

大庭芳太郎についてシーリング宣教師は次のように紹介している。

彼は敬虔な日本人で、約四〇歳である。彼はいのちの書に名前があることをいつも、とても喜んでいゝる。彼はほぼ一七〇〇人の子供達の日曜学校教師を誠実に、熱心に、そして謙虚にしている。彼は母国語の次に英語がよくできるほか、書物でドイツ語を学んでいて、会話をすることができゝる。上恩田の小さい村に、彼は妻と三人の子供とともに住む家を持っている。彼はすでに二〇年間喜びをもって主に仕えてゐる。人間的には、この新しい宣教地に簡単に入れたのは彼のおかげである。⁶⁶

大庭一家は引越しまでして、彼らが住んでいた住宅を自由に使わせた。大庭夫人は彼らの所に毎日来て、早朝から夕方遅くまで彼らの世話や料理をして仕えた。⁶⁷大庭牧師一家の献身的な働きは、シーリング宣教師も特に記したように、日本に來たばかりの宣教師たちが落ち着いて生活を始めることに大きく影響したと考えられる。

2・6・菊名の宣教師館の建設(図五、六)

冬の季節が近づいていたので、彼らは早く住宅建設に着手しなかった。建設用地については、大庭芳太郎が既に良い土地を彼らのために見つけてくれていた。それで彼らはそれを確かめに行き、他の建築用地と比べた。そして菊名に家を建てようと決めた。

九月二一日、ウーリッヒは主の働きのためにその場所を聖別した。彼らは小さなテントを建てた。そして、新鮮な気持ちで建設工事を着工した。建築士でもあったシーリング宣教師は、この建設作業を指導したと思われる。⁶⁸しかし数日後、最初に日本の土木局の許可を取らなかったために、はじめに建築作業用に建てた小屋を取り壊さなくてはならなかった。彼らは朝から夜まで働いた。彼らが作業を始めると、周りの村人が子供から大人まで大勢集まって来た。村人たちは好意的で、何人かは作業を手伝おうとしたり、また、お茶菓子を差し入れたりしてくれた。彼らにとってそれは、疲れた体を癒す主からの贈り物であった。大勢の人が集まるこの機会には伝道するのにはとても良いチャンスであったが、彼らは日本語が話せなかったために伝道できないことを残念に思った。

一月一日に彼らが移り入ることができただけのものが建てられた。九月末の着工から数えて、約一ヶ月で完成したことになる。この時建設された家は、平屋に屋根裏部屋が付けられた建物だった。その間取りは台所と小部屋の他に、大きな二つの部屋があり、その二つは合わせれば5m×10mの広さとなって、居間兼会堂として用いられた。

住宅建設が一段落すると、一二月二五日にレンゲ宣教師は南洋に向けて横浜を出発した。ちょうどこの時

に來日したシーリング夫人と二人の子供達、そしてレンゲ宣教師の婚約者であったマルガレーテ・ルートニク (Margarete Rudonick) 婦人宣教師を出迎えるためにシーリング宣教師と大庭芳太郎も途中まで彼に同行した。一月二六日に彼らは神戸駅で落ち合い、一時の交わりを持った。その後、シーリング宣教師たちは來日した一行とともに横浜に帰り、翌二七日の朝に菊名のこの家に到着した。その日の夜、シーリング宣教師たちはささやかながらクリスマスをお祝いした。マルガレーテ・ルートニクは大庭芳太郎牧師から一月二八日に横浜で行われる日曜学校のクリスマス祝会に来てほしいと言われて参加し、およそ三〇〇人の子供達の前でドイツの讚美歌を歌い、ルカの福音書二章一〇節から一一節の箇所から短くクリスマスの話をした。⁶⁹

結論

一九〇〇年代初頭、中国と南洋諸島で宣教活動を展開していたリーベンゼラ・ミッシェンは、第一次世界大戦のときに日本が南洋諸島を支配したことを契機に、日本との関わりを持つようになった。この時リーベンゼラ・ミッシェンの南洋諸島宣教を監督する立場にあったのがエルンスト・ウーリッヒであった。その後、南洋諸島における宣教活動は、一九一九年六月にドイツ人の退島命令が出されて中断させられた。

一九二五年の夏、日本は南洋伝道団の一員としてリーベンゼラ・ミッシェンに宣教再開の道を開いた。これを受けてミッシェン本部は、日本当局と南洋伝道団との交渉のために、エルンスト・ウーリッヒを日本に派遣した。彼は一九二五年末にドイツを発った。

一九二六年二月から、ウーリッヒは日本と南洋諸島を巡って交渉を重ねた。またその間に、日本で活動し

ていた他団体の宣教師や日本人キリスト者たちと交流した。その中で彼には日本宣教の重荷が与えられた。彼は日本滞在の報告をミッシェン本部に二度送っている。ウーリッヒはその二回目の報告書で、宣教再開交渉の情況や幅広い人的交流のほか、日本宣教の可能性についても触れた。ミッシェン本部はその可能性を受け止め、一九二七年三月の理事会では日本での働きについて議論された。

ウーリッヒの次に日本に派遣されたシーリング宣教師は、一九二七年六月一日の派遣式のスピーチで、日本を南洋宣教の拠点としてだけでなく、宣教地として捕らえていることを表明した。このようにリーベンゼラ・ミッシェンは、拠点開設の前に既に日本宣教の意志を固めていたことは明らかである。

リーベンゼラ・ミッシェンの日本宣教は、南洋諸島宣教のついでに始まったような印象を持たれることもある。しかし、決してそうではない。南洋諸島はリーベンゼラ・ミッシェンが日本との関わりを持つきっかけとなった。その関わりのなかで、まずエルンスト・ウーリッヒに宣教への召しが与えられた。ミッシェン本部は彼の報告を真剣に受け止め、次に、ウーリッヒに続いたシーリング宣教師たちは自らに与えられた使命として日本宣教を積極的に受け止めていることを表明した。

リーベンゼラ・ミッシェンは、ウーリッヒが軽井沢で受けた召しもあって、最初から地方での伝道を志していた。南洋諸島宣教の拠点としては、南洋の玄関口として横浜が候補地となったが、宣教地としては、ウーリッヒの念頭には埼玉があった。しかし、それは実現することはなかった。また、実際に宣教活動が行われた地域を見ると、宣教地に農村は見られるが、漁村は見られない。

一九二七年、リーベンゼラ・ミッシェンは、アダム・シーリング宣教師他三人の宣教師たちを派遣した。リーベンゼラ・ミッシェンでは、彼らが横浜に到着した一九二七年九月一日を、リーベンゼラ・ミッシェンによる日本宣教開始の日としている。大庭芳太郎牧師夫妻は来日した宣教師たちに自分たちの住まいを提

供し、生活面を支援した。シーリング宣教師は建築士としての賜物を生かして菊名に宣教師館を建設し、一月にはそこに移り住んだ。

このようにして、菊名に拠点を建設したリーベンセラ・ミッシェンは、これから南洋諸島宣教の支援とともに、日本宣教にも力を入れていくことになるのである。

注

1 本論文は、二〇〇八年度の卒業論文として東京基督神学校に提出された論文『リーベンセラ・ミッシェンによる日本宣教の歴史―そのはじまりから第二次世界大戦後の宣教再開まで―』の序論、第一章、結論を、本論文のために再編集したものである。本論文は、一九二七年までの歴史を取り扱う。それ故に、一九二八年以降に日本宣教のために派遣された四人の宣教師たち（エルンスト・ラング、ベルンハルト・ブッス、カール・ノートヘルファー、オットー・モジマン）については触れていない。

2 ハインリッヒ・ケルパーは一八六三年三月三日、牧師の子としてマイセンハイムに生まれた。彼はハレ、テュービンゲン、ユトレヒト、ボンで神学を学んだ後、一八八七年から一八八八年にかけて自ら志願してベルリンで近衛兵として兵役についた。それから彼は神学試験を受け、ボンで教えていたテオドル・クリストリープ (Theodor Christlieb) が設立していた伝道者養成学校「ヨハネウム」で神学教師として働いた。一八九〇年四月からハイデルベルクのフライエン・カッペレンゲマインデで奉仕し、その後、一八九四年四月から一八九七年五月までエッセンの教会で牧師を務め、一八九七年五月から一八九九年までシュトラスブルクのディアコニッセの牧師として働いた。ここに在る間に、ハイデルベルク

のホルステンヴァールにあるゲマインシャフトのレッシュマン (Röschmann) 牧師からチャイナ・インランド・ミッション・ドイツ支部の指導を引き受けるよう要請された。一九三六年七月八日召天。

3 ハドソン・テラー (一八三二年五月二日～一九〇五年六月三〇日) は、一八五四年三月、聖公会の中国福音伝道協会の宣教師として上海に上陸した。彼は太平天国の乱やアロー戦争など社会不安の中で伝道したが、一八六〇年に健康上の理由で一時帰国した。一八六五年 *China, its Spiritual Need and Claims* を刊行し、中国奥地の一一の省のプロテスタント未伝の地に対する伝道の必要性を訴えると、大きな反響を呼んだ。同年、彼はチャイナ・インランド・ミッションを設立した。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』(東京：教文館、一九八八)、九〇二―九〇三頁。

4 Liebenzeller Mission, *Die Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Liebenzeller Mission, 1925).

5 リーベンゼラ・ミッションはCIMによって導入されたフェイス・ミッションという理念を継承している。中村敏『世界宣教の歴史―エルサレムから地の果てまで』(東京：いのちのことば社、二〇〇六)、一一九―一二七頁。しかし、宣教方法の面では、病院伝道や学校伝道には消極的だったCIMとは対照的に、リーベンゼラ・ミッションはそれらを積極的に展開した。

6 クリスチャン・エンデヴァー (Christian Endeavor) は一八八一年二月にアメリカのメーン州ポートランドで牧会していたフランシス・E・クラーク牧師とハリエット牧師夫人の指導のもとに生まれた信徒運動で、アメリカで発足した後は急速に世界に広がった。ドイツには一八九四年に伝わり、急速に広まった。ドイツ語では *Entschiedenes Christentum* (EC) と言う。

この働きは、日本語ではキリスト教共励会と訳される。このアメリカ生まれの信徒運動は、リベラルな国教会と福音的なゲマインシャフトという二重の交わりが存在するドイツでは、ゲマインシャフトに

おける福音的な交わりを深めようとする目的とよく合致したと思われる。

日本には一八八五年に、クラーク牧師と神学校同窓で同志社大学の創立に協力したデーヴィス博士（会衆派宣教師）によって、岡山の山陽学校に組織されたのが最初である。日本では主に日本組合キリスト教会やメソヂスト教会を主として組織された（日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（東京：教文館、一九八八）、四二五頁、四五九頁、一〇七七頁参照）。

用いた資料については、卒業論文の参考文献表に記す。卒業論文のために日本国内で収集できた資料だけでは、歴史を構築することが難しかったため、ドイツのリーベンゼラ・ミッシェン本部で資料収集にあたり、ミッシェンの公文書保管室（Archiv der Liebenzeller Mission）の協力によって、リーベンゼラ・ミッシェンの機関誌 *Chinas Missionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*（以降『ヒナス・シリオネン』と表記。図一一参照）や写真画像など、多くの資料を入手できた。本論文は、これらの資料に大きく依存している。

8 K. E. Koch, *Heinrich Coeper und sein werk* (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, 1964), S. 425-435, 458-459. しかし、カール・カルムバッハ (Karl Kalmbach) による日本伝道の可能性については、一九二四年から二五年にかけて中国の湖南省の伝道地を視察した E・クーン (E. Kühn) 牧師も言及したと述べている (Karl Kalmbach, *Mit Gott von Mensch zu Mensch: aus der Geschichte der Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, 1999), S. 104.)。また、日本での働きを紹介するにあたって、当時伝道への刺激を与えた人物としてウーリッヒ牧師とクーン牧師の名を挙げている文献もある (Liebenzeller Mission, *Werden und Wachsen der Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, n.d.), S. 39)。¹⁾ しかし、ミッシェンの公文書保管所の調査によると、クー

ン牧師の湖南省視察の報告書の中に日本に関する言及はなく、また、彼は日本に立ち寄ったわけでもない。それ故に、仮にその言及が事実だったとしても、日本伝道への影響はウーリッヒ牧師のほうが大きいと考えられる。

9 中道基夫氏はキルヘ (Kirche) とゲマインデ (Gemeinde) の違いについて次のように説明している。

『日本語の教会を表す言葉として、Kirche と Gemeinde (キルヘとゲマインデ) という二つの言葉がある。Kirche は、教会執行部などの教会組織全体や社会的な存在としての教会、教会堂の建物を指す言葉として用いられる。それに対して Gemeinde は各個教会、もしくはその教会の信徒の有機的なつながりを指す言葉として用いられる。』中道基夫『現代ドイツ教会事情』(東京：キリスト新聞社、二〇〇七)、二二七頁。ゲマインデはゲマインシャフトとも呼ばれる。

10 Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1938), S. 74. 一九五二年に来日したエステル・ペンツィンガー婦人宣教師は、子供の時にマンハイムでの彼の伝道の様子を覚えていた。

11 出岡学「南洋群島統治と宗教——一九一四〜二二年の海軍統治期を中心にして——」『史学雑誌』第一二二編第四号、二〇〇三年四月、五三頁。平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍 外交と軍事との連接』(東京：慶応義塾大学出版会、一九九八)、六二頁。

12 Karl Kalmbach, *Mit Gott von Mensch zu Mensch: aus der Geschichte der Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, 1999), S. 104.

13 Heinrich Hertel, "Zum Gedächtnis unseres lieben Bruders Pfarrer Ernst Uhlig." Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Li-

ebenzer Mission, 1938), S. 71.

Ibid., pp. 69-72.

出岡学「南洋群島統治と宗教——一九一四—二二年の海軍統治期を中心にして——」『史学雑誌』第一二二編第四号、二〇〇三年四月、五一—七二頁。出岡氏によると、宣教師の安否に関してYMCAやローマ法王の特派使節による照会や申し入れがあった。またアメリカの教会も強い関心を示した。ドイツ人宣教師の退島が実施された後の一九年一〇月には、「米国National Lutheran Council（ルター派全国協議会）」が「対独（講和）条約第四三八号に規定せる旧独逸布教団の事業管理」を出願したとする報告が、松井慶四郎大使から内田外相に送られている。（同論文、六四頁）

Liebenzeller Mission, *Chinas Missionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1916), S. 229.

この時の日本との接触はわずかな時間に終わっており、まだ日本を宣教地と捉える意図は見られない。この時期の記録は戦争の混乱期で、ミッションのアーカイブにも二つの手紙しか残っていない。一九一六年一月三〇日に、彼は日本当局によって南洋諸島からデンゲ宣教師とともにトラック島から追い出された。アルメニアに派遣されていた別の団体のアンナ・グライナー (Anna Greiner) 婦人宣教師がケルパー牧師に宛てた手紙によると、ウラジオストックから上海に来ていた彼女は、上海からアメリカ経由でドイツに帰ろうとしていたグループに加わった。彼らはその途中で長崎に立ち寄った。そこで彼女は、南洋諸島でウーリッヒ牧師と一緒に追い出されたカトリックのゲルハルト (Gebhardt) 神父に会った。彼も彼らの船に乗ってドイツに帰る予定だった。彼女は彼からウーリッヒ牧師について知っているかと聞かれて、知っていると答えるというのと教えてくれた。それによると彼は戦争捕虜として日本

に連れて行かれたとのことであった。

- 17 Liebenzeller Mission, "Diverse Abschriften aus Protokollbuch ab 1922 zum Thema Beginn in Japan." *Protokollbuch*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 2007), S. 1.
- 18 Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1926), S. 129.
- 19 Liebenzeller Mission, "Diverse Abschriften aus Protokollbuch ab 1922 zum Thema Beginn in Japan." *Protokollbuch*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 2007), S. 1.
- 20 Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1926), S. 6. しかし、一九三八年のウーリッヒ牧師の葬儀の際の文章では「二月二十九日となつてゐる」。
- 21 *Ibid.*, S. 76.
- 22 *Ibid.*, S. 51.
- 23 *Ibid.*, S. 51. 実際にメーダー宣教師一家とシュナイダー婦人宣教師とツベル婦人宣教師が Yawata Maru ボーリング諸島に渡ったのは一九二七年二月二四日のことだった (Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1927), S. 97)°
- 24 Ernst Uhlig, *Erlebnisse und Erfahrungen während meines zweiten Aufenthaltes in Japan v. 18. Juni-22. August 1926. Im Blick auf den etwaigen Beginn einer Missionsarbeit in Japan*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1926), S. 1.

- 25 日本伝道隊百年史編集委員会編『日本伝道隊百年史』（神戸：日本伝道隊、二〇〇三）、四五頁。〃一九〇三年の英国ケズイックで生まれたJ・E・Bは、その年東京で、パゼット・ウィルクスを現地主幹として日本人側から竹田俊造、三谷種吉、御牧碩太郎、宣教師側からプレスウエイト夫人を評議員として創立された。〃
- 26 *Ibid.* S. 1.
- 27 *Ibid.* S. 9. 七月一二日の記述。
- 28 横浜市役所編『横濱市史稿神社・教会編』（東京：名著出版、一九七三）、二二三～二一四頁。
- 29 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（東京：教文館、一九八八）、一二六頁。
- 30 横浜市役所編『横濱市史稿神社・教会編』（東京：名著出版、一九七三）、二二三～二一四頁。『基督教新聞』第一三四号（一九一六年四月）によれば、一時期日本伝道隊がこの伝道館の働きを持っていたが、一九一六年三月で伝道隊は手を引き、スメルサー宣教師に託された。この時の日本人同労者として名前が挙げられているのは、宮清八と斧山という人物で、大庭の名はない。
- 31 この人物は、一九二三年から一九二七年まで日本基督教連盟の初代総幹事であった宮崎小八郎であると思われる。彼は合同教会の牧師でもあった。都田恒太郎『日本キリスト教合同史請稿』（東京：教文館）、一九六七）、七一～七二頁。
- 32 日本伝道隊百年史編集委員会編『日本伝道隊百年史』（神戸：日本伝道隊、二〇〇三）、七二頁。
- 33 矢内原は、当時南洋諸島の研究をしていたということもあって、ウーリツヒ以外にもリーベンゼラ・ミッシェンの宣教師たちとも接触があった。例えば、一九三三年七月三日から九月一六日にかけて矢内

原は南洋諸島のフィールドワークにでかけ、その模様を『南洋群島旅行日記』に表しているが、七月二七日に体調を崩しながらパラオ島のコロールに到着した矢内原を、翌日の二八日に訪ねたのがパラオで宣教していたリーベンセラ・ミッシェンのレンゲ宣教師であった。レンゲ宣教師は彼の住むオギワル村に矢内原を招いたので、矢内原は八月三日までレンゲ宣教師と行動を共にした。七月三〇日日曜日には、レンゲ宣教師の開拓している教会の礼拝に参加し、矢内原がドイツ語で説教し、レンゲ宣教師が通訳した。矢内原はレンゲ宣教師と東京で面識があったと記しているので、レンゲ宣教師が日本滞在中に会う機会があったことがわかる。この日記以外には、矢内原と彼との会話が記された「日独問答」という一文が『矢内原全集』第一八巻二二五～二二七頁に収められている。

34 内村鑑三『内村鑑三全集三五』（東京：岩波書店、一九八三）、七七～七八頁。

35 *Ibid.* S. 14.

36 *Ibid.* S. 14.

37 内村は中国で働いていたCIIMの医療伝道にも献金していた。また、アフリカのシェバイツァー博士の医療事業にも献金していた。内村は、昭和二年五月五日付けの *The Japan Christian Intelligencer*. Vol.II, No. 3 の次のように記している。“It has been our privilege to have a slight part in the medical work of the China Inland Mission for some yeras. We are responsible for the support of a Chinese doctor in Wilson Memorial Hospital Pingyang, Shansi Province; and our friends have gladly supported us in this what we consider to be a great luxury of our Christian life. The accusation of our missionary-critics that we are “bitterly opised to missionaries.” is our only partially true. We are not opposed to all missionaries. In Central Africa, South Sea Islands, besides China and our own Island Empire, we are

permitted to cooperate with some missionaries who understand us, and take us into their hearts, notwithstanding our outspokenness in some matters. The following is one of the letters which cheer us from the seas. — Editor." (内村鑑三『内村鑑三全集三〇』(東京:岩波書店、一九八二)、五〇九～五〇一頁)

38 年会議事録にも、彼が客員として様々なセッションに参加したことが記録されている。肩書きは「カリネ諸島のリーベンゼラ・ワッシュン監督宣教師」となっている。Federation of Christian Missions in Japan, "Minutes of the Annual Meeting, Federation of Christian Missions in Japan (Abridged)," *The Japan Christian Quarterly*, Vol. 1, No. 4 (October 1926), p401.

39 Dunlop J. G., "The Missionary in Rural Evangelization," *The Japan Christian Quarterly*, Vol. 1, No. 4 (October 1926), pp.316-328. ダンロップ宣教師(一八六七—一九三二)は、一八八五年イービの自給伝道隊に応募して来日し、浜松で御雇教師となった。一八八八年日本メソヂスト教会の所屬となり、長野、静岡、本郷、高田で奉仕。一八九七年カナダに帰り、アメリカ長老教会に移籍。一八八九年再来日し、一九一八年まで日本基督教会金沢教会に赴任。その後、東京(一九一九—一九二二)、津(一九二二—一九三二)と開拓伝道に従事。軽井沢で死去。『日本キリスト教歴史大事典』八五八—八五九頁。

40 K. E. Koch, *Heinrich Coerper und sein werk*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, 1964), S. 426.

41 Ernst Uhlig, *Erlebnisse und Erfahrungen während meines zweiten Aufenthaltes in Japan v. 18. Juni-22. August 1926: Im Blick auf den etwaigen Beginn einer Missionsarbeit in Japan*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1926), S. 19.

42 *Ibid.*, S. 22.

43 Liebenzeller Mission, "Diverse Abschriften aus Protokollbuch ab 1922 zum Thema Beginn in Japan."
Protokollbuch. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 2007), S. 1.

44 *Ibid.*, S. 1.

45 *Ibid.*, S. 1.

46 *Ibid.*, S. 1.

47 Walter, F., "Missionar Adam Syring, Calw." (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1963),
S. 1.

48 シュツニツガハト出身の神学者 Christian Gottlob Barth (一七九九—一八六二) の語。EG257 の第三番。
49 Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1927), S. 130.

50 中山和芳「植民地状況におけるキリスト教の役割——シクロネシア連邦、コシャエ島とポーンペイ島の事例」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化——人類学のパースペクティブ』(東京:新曜社、一九九七) 九九—一二六頁。

51 Ernst Uhlig, *Ergebnisse aus meinen "Erlebnisse und Erfahrungen während meines zweiten Aufenthaltes in Japan"*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1927), S. 1-3.

52 *Ibid.*, S. 1.

53 ズイツからのミッシェンとては、日本にリベラル神学を紹介した普及福音新教伝道会 (Allgemeiner Evangelisch-Protestantischer Mission-verein) である。一八八四年ドイツのヴァイマルで結成され、

一八八五年に最初の宣教師W・シュピンナーが来日した。主な伝道地は東京と京都であった。

54 *Ibid.*, S. 1.

55 *Ibid.*, S. 2.

56 別の文献では、リーベンゼラ・ミッションの日本における宣教地として、最初に北海道が考えられている。たつた記録がある (Liebenzeller Mission, *Werden und Wachsen der Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, n.d.), S. 39.)。しかし、ウーリッヒ宣教師の一九二六年夏の報告では、既に理事会は北海道という考えをやめたようなので、温度に関する情報は書かないと記している (Ernst Uhlig, *Erlebnisse und Erfahrungen während meines zweiten Aufenthaltes in Japan v. 18. Juni-11.11. August 1926: Im Blick auf den etwaigen Beginn einer Missionsarbeit in Japan*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1926), S. 21.)。"ミッションの宣教師達の話でも、北海道は理事会の中で一つの可能性として無視されたという事だ"とある。北海道は理事会の中で一つの可能性であった。

57 *Ibid.*, S. 2.

58 *Ibid.*, S. 2.

59 *Ibid.*, S. 2.

60 *Ibid.*, S. 2.

61 *Ibid.*, S. 2.

62 *Ibid.*, S. 2.

63 Karl Kalmbach, *Mit Gott von Mensch zu Mensch: aus der Geschichte der Liebenzeller Mission*. (Bad Liebenzell: Verlag der Liebenzeller Mission, 1999), S. 106.

- 64 大庭芳太郎牧師については、本論文一四〇一五頁も参照せよ。
- 65 この辺りが横浜市に編入されるのは昭和一四年である。宣教師達が働き始めた頃は田奈村大字恩田と
 いった。
- 66 Liebenzeller Mission, *Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee*. (Bad Liebenzell: Archiv der Liebenzeller Mission, 1928), S. 130.
- 67 *Ibid.*, S. 130.
- 68 一九一一年、台風によってキティの会堂が破壊されたとき、建築士でもあったシーリング宣教師は新会堂を建設した。⁶⁹ Buddeberg, Ernst, *Das Kreuz auf der Südsee: Aus dem Erleben der Liebenzeller Mission* (Bad Liebenzell: Buchhandlung der Liebenzeller Mission, n.d.), S. 18.
- 69 *Ibid.*, S. 63-64.

図1 ハインリッヒ・ケルバー夫妻



図2 エルンスト・ウーリッヒ牧師



図3 鎌倉大仏前のヘルテル牧師
と大庭芳太郎牧師（ヒナス・ミリ
オネン 1940年7頁、1938-39年
撮影。一部拡大。）

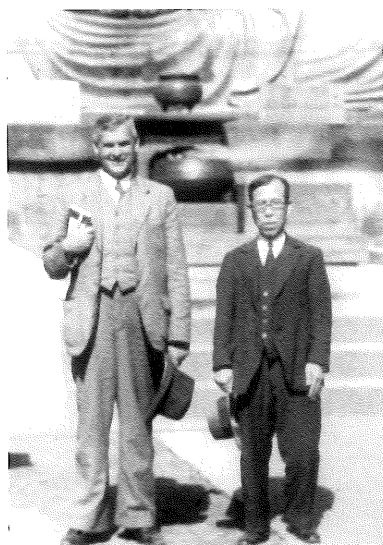


図5 菊名の宣教師館建設
（1927年）

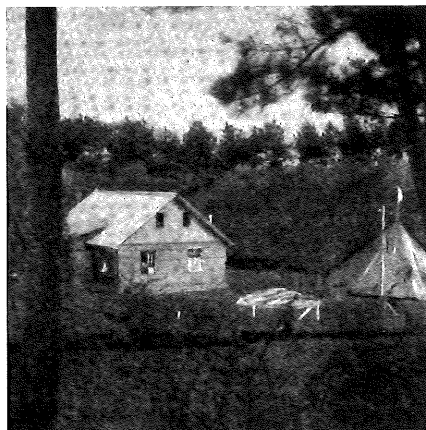


図6 菊名の宣教師館

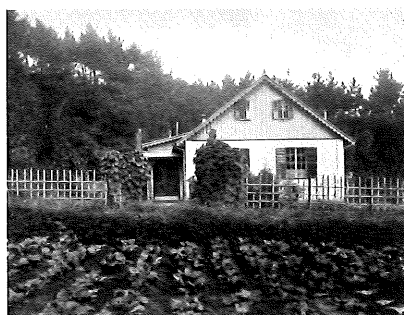


図4 シーリング宣教師夫妻



図7 ミッションのパンフレット表1 (1925年)。

内容はミッションの方針や働きを紹介。

縦 13.6 cm 横 10.4 cm

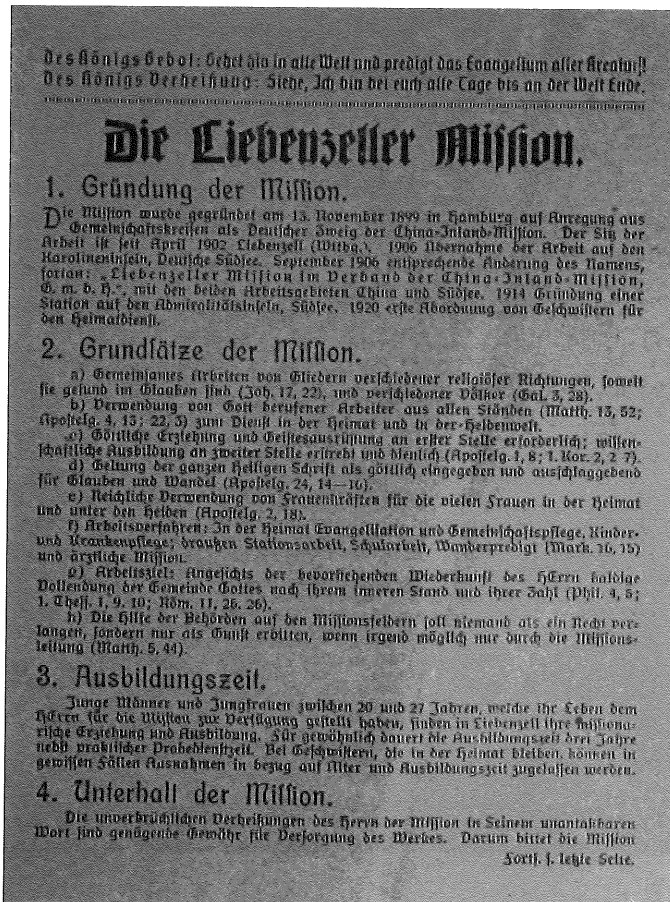


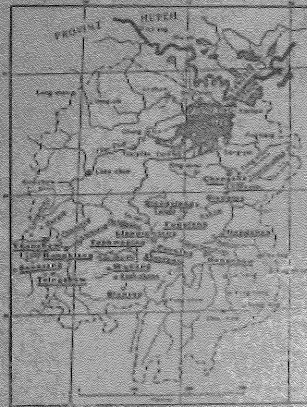
図8 ミッションのパンフレット表2 (1925年)

nicht Menschen um Gaben und veranstaltet keine Sammlungen; sie macht auch keine Schulden (Röm. 13, 8). Freiwillige Sammlungen der Liebe (Missionsthürken liegen auf Wunsch zur Verfügung) und Gaben von solchen, denen der Herr das Herz bewegt und das Werk aufs Herz legt als Antwort auf die Gebete der Glieder der Mission, werden dankbar angenommen. (Vermächtnisse an: Liebenzeller Mission, I. Verb. d. China-Inland-Mission, G. m. b. H., Liebenzell; Pönischekonto Stuttgart Nr. 3865.) Den Gliedern der Mission ist kein festes Gehalt gewährt, sondern alle haben ihren Unterhalt von ihren himmlischen Herren zu erbitten und zu erwarten. Was Gottes Volk der Mission in die Hand legt, verteilt dieselbe nach bestem Ermessen. Matth. 6, 33 und Pf. 34, 10, 11 in leit. Leitung der Mission vielfältig erprobt worden. Was künftige Versorgung der Missionäre betrifft, so sind dieselben ebenso versorgt wie die Mission selbst, deren Glieder sie sind. Sie alle vertrauen dem Herrn und bekennen Lukas 22, 33. Die in der Heimat angefallenen Geschwister beziehen meist ein festes Gehalt von den Gemeinschaftskreisen, denen sie dienen.

5. Zeitschriften der Mission; Buchhandlung.

„Chinas Missionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee“, monatliche Berichte aus der gesamten Arbeit und „Missions-Glocklein“, Kinder-sonnensblatt. Preise für jedes der Blätter jährlich bei 1—4 Stück je 1.— Mk., ab 5 Stück je 80 Pf. Änderungen vorbehalten. Sämtliche Bestellungen und Zahlungen nur: Liebenzeller Mission, Liebenzell. — Buchhandlung: Eigener Verlag, Beschaffung anderer guter Schriften. Verzeichnis auf Wunsch gern unsonst.

Provinz Honan.



6. Stand der Mission am 1. Januar 1925.

China: 15 Haupt- und 58 Nebenstationen, 20 verheiratete, 9 unverheiratete Missionäre und 50 Missionschwwestern (hier von in Urlaub 4 verheiratete Missionäre und 6 Schwwestern; im Heimatdienst 2 verheiratete, 1 unverheirateter Missionär und 5 Schwwestern). Ferner 203 eingeborene Helfer, Lehrer und Bibelfrauen.

Südsee: 8 Hauptstationen, davon in Folge Ausweisung unserer Gesandten 3, St. nur 1 (Manus) befeh von 1 verheirateten Missionär. (Dahleim 4 verheiratete, 2 unverh. Missionäre u. 5 Missionschwwestern.)

Des Königs Ermahnung: Seid fest, unermüdet, nehmet immer zu in dem Wert des Herrn, indem ihr wisst, daß eure Arbeit nicht vergeblich ist in dem Herrn.

Komme bald, Herr Jesus!

図9 ミッションのパンフレット裏1 (1925年)

内容は曜日毎のミッションの祈祷課題

(日曜から水曜)

Für unsere betenden Freunde. Saget Dank allezeit für alles!

Sonntag: Anbetung, Lob und Dank dem dreieinigem Gott für Sein wunderbares Werk der Schöpfung, Erlebung und Errettung. Bitte, daß Sein Reich in aller Welt in Macht gebaut werde, daß das Volk Gottes sich zur Sabbathruhe führen lasse und daß der Herr bald wiederkommen möge. Dank für bisherige Veranlassung des Werkes und Erhaltung des Freundeskreises in der Heimat und Bitte um Darreichung alles dessen, was zur Führung und Ausbreitung des Werkes daheim und draußen nötig ist.

Montag: Dank für Erhaltung der jetzt noch offenen Türen auf dem Missionsfeld. Bitte um Wiederöffnung der zurzeit verschlossenen Türen. Fürbitte für Leitung des Werkes in der Heimat und draußen, für die gesamte China-Inland-Mission, für Ausbildung und Gesundheit der Geschwister und für die in China neu angekommenen Brüder Dr. Herr, Salgeber und Zimmermann, Schwedern Hinz, Klenert, Neiger, Stotzer und Zwanziger, für die in der Heimat weilenden Geschwister und ihren Dienst in der Heimatarbeit. (56 Brüder und 79 Schwestern beheim in der Heimat) arbeitet und im Probedienst einschließlich den in der Geschäftsliste noch näher angeführten Missionaren und Missionarinnen).

Dienstag: China: Station Changsha (Arbeit in der Innenstadt und Außenstadt, Gemeindearbeit, Blindenschule, Missionarskinder-Schule, Frauen-Bibelstunde). 7 Außenstationen. — Miss. Sup. Wit und Frau, Geschwister Wohlschläger (Heimat), Stenbe und Witte, Lehrer Hildbrand, Schwan, Denninghoff, Geising (Heimat) und Vafel.
Station Siangtan. — Schw. Schröder, Vork und Kentscher (beide Heimat).
Station Hengshan, 2 Außenstationen, und Station Hengchow, 4 Außenstationen. — Geschwister Bröten.
Südssee: Ponape (Stationen: Wa in Metakam mit Außenorten, Ron-Kiti in Kiti mit Anapen, Wone, Ulan-Palang, Keisante mit U und Jokoris). Jugendbünde.
Die zu Ponape gehörenden Inseln: Pingelap, Mokil, Ngatik, Nukunor, Kapinamarang. (Die eingeborenen Lehrer und Arbeiter selbst). — Miss. Sup. Wylig, Geschw. Spring, Br. Seibold und Schw. Köster (ämtlich Heimat), Eingeborene Heller und Hampe.

Mittwoch: China: Station Siangjiang, 3 Außenstationen. — Geschw. Grohmann (Heimat) und Seeliger.
Station Hungfeng, 1 Außenstation. — Geschw. Schindewolf und Schw. Baurer.
Station Siangtowang, 4 Außenst. — Geschw. Kampmann und Schw. Gatz (beide Heimat), Geschw. H. H. Reher.

Diese Spalte dient zur Eintragung besonderer Fürbitten und Namen.

Auf Briefen ist außer der Station noch die Provinz anzugeben, z. B. Changsha, Hsien, China und „via Sibirien“.

図10 ミッションのパンフレット裏2 (1925年)
 ミッションの祈祷課題の続き (水曜から土曜)

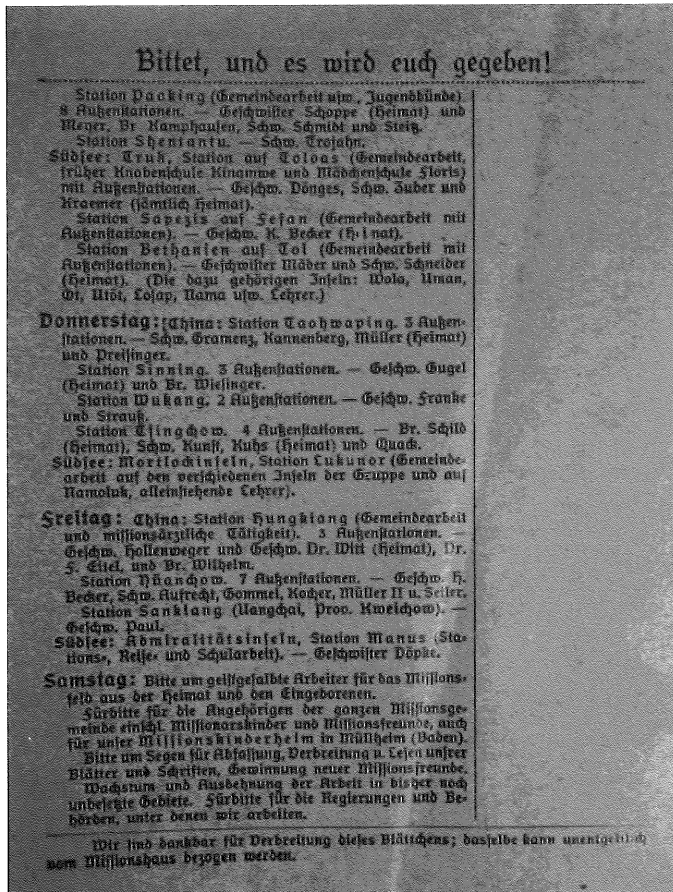


図 11 リーベンゼラ・ミッションの機関誌

Chinas Millionen, vereinigt mit dem Missionsboten aus der Deutschen Südsee.

(1925年のヒナス・ミリオン表紙)

縦 21.5cm 横 16.2cm



出典

図 1～6 Archiv der Liebenzeller Mission 所蔵

図 7～11 筆者所蔵